

# 十三世紀イングランドにおける

## 羊毛輸出貿易とその基盤 (続)

——封建的市場構造「前期」把握への一操作——

近 藤 晃

### 目次

- 一 序説 問題の所在と限定
- 二 北西部教会領と羊毛貿易——ペゴロッティ・リストを中心として——(以上前々号)
- 三 北西部所領における羊毛販売契約と「*arraha*」(以下本号)
- 四 領主による羊毛の転売体系たる「*collecta*」と「讓渡利潤」の掌握
- 五 結 び

### 三 北西部所領における羊毛販売契約と「*arraha*」

〔一〕 当面の巨大宗教所領における羊毛の販売は、前掲の「ペゴロッティ・リスト」も示唆するように、主として、

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤 (続)

当時イングランドの羊毛輸出貿易を壟断していた外国商人との間に、定期的な販売契約を結ぶことによって行われたものである。以下、われわれは、まずそうした契約の具体像を示すことから始めよう。

(1) 十三世紀の羊毛輸出貿易における外国商人の優越は、すでに研究史の一致して示すところである。旧くは『がまんのならな』ほど浅薄な趣い意味での中等教員の学問である』とソムバルトが罵倒した(W. Sombart, *Der moderne Kapitalismus*, Bd. I, Nr. 2 1916, SS. 309—310. 岡崎次郎訳「近世資本主義」第一卷第二册四五四頁)『あのA. シャマンの論稿』A. Schaubé, *Die Wollausfuhr Englands von Jahre 1273*, VSWG. Bd. VI, 1908 が明かにしたように、一二七三年、イングランドから輸出された羊毛総量三三〇〇〇サツクのうち、その六五パーセントは外国商人によって取扱われており(ソムバルトはこの点についてのミシヤマンの批判を承認した)『さらに、それらの外国人による取引の内訳は、イタリア商人によるものが二四パーセント、フランス、フランス北フランスの商人によるものは二七パーセントであった。Schaubé, a. a. O., S. 68 ; E. Power & M. Postan (ed.), *Studies in English Trade in the Fifteenth Century*, 1938, p. 39. イタリア商人の主要な所属商會名とそれらの取引高は次のとおりである。

Name of Firms	Quantity of Exports		Prices of Exported Wool in Mark (Sterl.)
	in Sack	in dz.	
Cerchi : Florence	400	660	4, 000
Macci : "	640	1066	6, 400
Falconieri : "	620	1034	6, 200
Nic. Testa & Co. : Lucca	700	1166	7, 000
Bardi : Florence	700	1166	7, 000
Frescobaldi : "	880	1466	8, 800
Ricciardi : Lucca	1080	1800	10, 800
Scotti : Piacenza	2140	3566	21, 400

(Schaubé, a. a. O., S. 183の表より抄成)

また、一二七五年から六年にかけて(約一〇ヶ月間)、ハルの港から輸出された羊毛等に関する関税徴収記録 (custom accounts) によれば、その間、総額一、四三二磅七志にのぼる関税が賦課された諸商品のうち、羊毛は四、〇五八サック、羊毛皮 (woolfels) は四、七〇四枚であったが、関税を納めた商人は、イギリス人一三人、外国人一八八人となっている。N. S. B. Gras, *The Early English Custom System*, pp. 111, 224-225.

#### 〔事例 I〕アーデン修道尼院

まず典型的な事例として、一三〇三年の《*Plea Roll of the Exchequer*》に提示されるヨークシャーのアーデン修道尼院(Arden)とイタリア商社フリスコバルディ (Friscobaldi : Florence) との契約を取りあげたい。この修道尼院はクリーヴランド Cleveland 所在のベネディクト派のものであるが、一二九一年に締結した契約を修道尼院が履行しなかったという理由で同年提訴されたものである。以下、前記の史料から該当箇所を訳出・引用してみよう。

……〔提出された書面によれば〕アーデンの尼僧院長とその尼僧院は以下の件を認めている。すなわち、彼らはフリスコバルディの商人、Coppus Cotenni, Chynus Thybang, John Wipus にたいし、一二九一年度の前記アーデンの尼院の全ての羊毛出版売し、<sup>1</sup> 専ら以後九ヶ年間に、一サックあたり一一・五マークで〔その羊毛を〕完全に引渡すこと。また、前記の羊毛は当該商社の慣例に従い、充分に調整され計量されること。当該商人は前払金として、(in aris) 良質のスターリング貨幣にて前記の尼僧院長と尼僧院にたいし一〇磅を支払うこと。そして、〔契約の〕最後の年に前述の一〇磅は同一の商人にたいして完済されるべきこと。また当該商人はアーデンにおいて、契約期間中、毎年聖ミカエル生誕日の次の安息日までの間に、前払金として一〇磅を支払うべきこと。前記の羊毛に関する一切の余剰は、その羊毛が引渡される際に当該商人が前記の尼僧院長と尼僧院にた

いして支払う。また彼ら「商人」は自己の費用により羊毛梱包人を用意し、尼僧院長と尼僧院は、自己の費用により、その羊毛を期間中毎年バイランド僧院の羊毛倉のあるソーブ Thorp まで運搬する。……<sup>(2)</sup>

〔事例 Ⅱ〕 カークストール修道院

ペロロッティ・リストに  $\blacktriangle$  *annone da. 25. saccha 1' anno*  $\blacktriangledown$  と記され、この史料では最も高い価格水準を示していたこのシトー派修道院の場合には、<sup>(3)</sup> その  $\blacktriangle$  *Coucher Book*  $\blacktriangledown$  が定期販売契約の実態を明かにしている。すなわち、一二九二年同修道院はルッカ Lucca の商社ベッティ家 Betti にたいし、その収納する全羊毛を一〇ケ年にわたって販売する契約を結んでいる。その契約の方式は複雑であり、最初の三ケ年間については、全羊毛は一括して一サク当り一一マークの価格で販売し、また残余の七ケ年についてはシトー教団独自の方式であるあの上中下三規格に羊毛を分類する方式を採用し、それぞれ一サク当り一五マーク、九・五マーク、八マークの価格で販売することとしている。同修道院がこの契約に当って受理した「前払金」は総計八〇〇マーク(一、二〇〇磅)に及び、契約期間たる一〇ケ年間に等分に支払われている。<sup>(4)</sup>

〔事例 Ⅲ〕 ファウントゥンス修道院

イングランドにおけるシトー教団最古の歴史を誇りかつ教団活動の中軸でもあったファウントゥンス修道院は、牧羊営においても教団随一の規模をもつものである。この修道院が、外国商人との間に結んだ羊毛販売契約については、これまで次の三つの件が明かにされている。<sup>(5)</sup>

〔1〕 一二七六年、この修道院は、フロレンスのテットカルデイ商社 Thetchaldi の手代 Dunelino Jonte との間に四ヶ年の定期販売契約を行ない、品質の劣悪な羊毛と羊毛皮を除いた六二サックの羊毛を毎年譲渡している。この羊毛は、「事例Ⅰ」の場合と同様、修道院の負担において調整され計量されたのち、クリフトン Clifton (Yorks.) にて商人に引渡された。羊毛を引渡す時期は毎年聖ヨハネ生誕節の一五日目に当る六月一五日と定められた。ファウントゥンス修道院は、この契約によって、「前貸金」六九七・五マーク (約一、〇四六磅) を受取っている。<sup>(6)</sup>

〔2〕 一二八〇年、さらに数名のフロレンスの商人と五ヶ年の定期契約を結び、一サック当り一二マークの取引価格で、毎年二六サックの羊毛を販売している。<sup>(7)</sup>

〔3〕 一二八四年にもこの修道院の羊毛販売契約が行われた。この契約はリコマンニ Ricomanni にたいするものであるが、契約期間は三ヶ年、毎年一サックにつき一六マークの価格で六サックの羊毛が譲渡された。この契約のために支払われた「前貸金」は二八八マーク (約一九二磅) とされている。<sup>(8)</sup>

#### 〔事例Ⅳ〕 フォーティバス家の所領 (ホールダーネス)

こうした外国商人との「前貸金」を伴った定期販売契約の締結は、決して修道院所領に限られたわけではない。同じような事実も世俗所領についても検出することができる。以下、一世俗領における事例をも併せて提示しておく。当面の所領は Countess of Devon たるイサベラ・ドゥ・フォートィンヌ Isabella de Fortibus の領有するもので、十三世紀当時、ハル周辺のホールダーネス地区 Wapentake of Holderness に存在する一〇の直営地からなるものであった。<sup>(9)</sup> これらの直営地群は、ベイリフを通じて、キアリスブルック Carisbrooke Castle を所領中心と

して統一的組織的に管理されていたが、<sup>(10)</sup>当時、ほとんど全イングランドに散在していたフォーティバス家の所領のなかでは、このホルダーネスの所領は最大の牧羊的中心であった。一二六五年の「minister's accounts」には、七、八一六頭の羊がここに飼育されていたことが明かにされている。<sup>(11)</sup>この所領における牧羊経営と羊毛の商品化機構は、当時聖俗所領の区別なくかなり普遍的であったと思われる、あの「internaoial」な方式によって運営されており、<sup>(12)</sup>ベイリフの権限を介入せしめることなく、領主に直属する「家畜管理人」(stock-keeper)がその配下に一名の「牧羊人」(shepherd)を擁して管理の責に任じていた。<sup>(13)</sup>

さて、この世俗所領における羊毛販売の実態は、そうした理由から「家畜管理人」の「accounts」によって知ることができるのであるが、それによれば、一二六〇年から一二八〇年にかけて、ルッカの高名な商社リカルデイ Riccardi にたいし、一八年間にわたって羊毛を継続的に販売していたという事実を確認することができる。すなわち一二六〇年以降、最初の五ケ年については、契約された販売量はそれぞれ二〇、三〇、三六、三一、三四サックであったが、一二七一年以後は売渡された羊毛の量は三八サック前後にまで増加している。契約した販売量はこのように年々変化をみせているが、取引価格はつねにこの二〇年間一貫して一サック当り八・五マークに固定されている。また、このほか品質の劣った羊毛が、同じ時期に、同じ商人にたいし、一サック当り四・五マークの価格で販売されている。<sup>(14)</sup>

(10) H. Hall (ed.), Selected Cases concerning The Law Merchant. A. D. 1239—1633, Vol. II : Central Courts. Publ. of Selden Society, Vol. XLVI, 1930, pp. 69—70.

(11) Cunningham, Op. cit., p. 631.

(12) W. T. Lancaster & W. P. Baildon (ed.), The Coucher Book of The Cistercian Abbey of Kirkstall in West

Riding of the County of York. Thor. Soc. Publ. Vol. VIII. Pt. II, 1901. pp. xxiii—iv, No. CCCXXIV [p. 225—27]; Donkin, op. cit., pp. 7—8.

(15) Knowles, op. cit., p. 227 seq.

(16) Wroot, op. cit., pp. 14—5.

(17) (18) N. Denholm-Young, *Seignorial Administration in England*, 1937, p. 54.

(19) N. Denholm-Young, *Yorkshire Estates of Isabella de Fortibus*, York. Arch. Journ. Pt. 124, 1934, p. 405 seq. 十三世紀にフォートブス家がホーンターネムに有つた直轄地は、Burstwick, Kintsea, Withernsea, Hornsea, Cloton, Easington, Keyingham, Little Humber, Ravenser Odd, the burgh of Hedon, などを (Ibid., p. 405) 放牧地はこの地域の南部に集中的に設けられた (ditto, Administration, p. 59.)。

(20) Denholm-Young, Y. A. J., p. 391.

(21) ditto, Administration, p. 59 and note.

(22) この牧羊の《Intermanorial》な機構については、おとあたり H. M. マイチが十三・四世紀のクロウランド修道院に分析を加えた論稿、F. M. Page, *Bidentes Hoylandie*. Econ. Journ. Supp. "Economic History" No. 4, 1929 を参照のこと。

(23) この当時の「家畜管理人」の管理事務は最高の羊保有頭数を示すケインガム・マナーにおいて遂行されており、そのマナーの一農奴が就任している。彼は三四志の「賦役免除金」(quitance) を上納しているが、このマナーでの《Opera vendita》が一ボウイート当り僅か一志二片にすぎなかった事実をみれば、この特権的農民の富がいかに大であったかを知ることができよう (Denholm-Young, op. cit., p. 59)。

(24) Ibid., p. 60.

(二) 以上に列挙した若干の事例から、十三世紀における封建所領と外国商人との間に交わされた販売契約の実態はほぼ明かになったものと思われる。この定期販売契約の起源については明瞭に示しえないが、ジェンキンス

H. Jenkinson は、ラウス・パーク修道院がヘンリー二世の時代に一ナダヤ人商人と六ヶ年の販売契約を結んだ事実を指摘し<sup>(15)</sup>、また、一一八一年、既にかかる商業慣行にたいする制限令が、シトー教団の《General Chapter》によって公布されている<sup>(16)</sup>。この二つの事例に依拠するとき、当面の定期販売契約の端緒的存在は、十三世紀以前にまで遡っていることは明かなところである。

では、このような羊毛輸出商人との定期販売契約はそれぞれの所領経済のうえにいかなる作用を及ぼしたであろうか。ウィットウェルは、当時の外国商人の営みについて、『彼らは羊毛貿易と併行して活発な金貸業を行っていた。……とくに、好んでその羊毛を担保として、修道院に自己の貨幣を貸付けていたが、その貸附金は……しばしば価値以下でなされる現実の羊毛購入に結びついていた』<sup>(17)</sup>と評している。このようにそれはつねに現金の前払いを伴う「前貸契約」たる性質をおびていたため、しばしば商人の一方的なイニシアティブを保証し、「双務的」な要素よりはむしろ「片務的」な要素の濃い関係を形づくっていたのである。以下、狹隘な研究条件のため、系統的な理解に到達することは望みえないのであるが、なお二三の実例に拠りながら、若干の問題点を指摘してみたい。

〔A〕 担保の設定と所領特権の制約

まず、一二七六年、前掲のファウントゥンス修道院が、テットカルディ商社との間に取しかわした契約文の一部をここに掲げてみよう。【前段〔事例Ⅲ〕の(1)】

……前記のあらゆる契約諸事項の堅固にして誠実な遵守と履行のために、われわれは当該商人とその商社にたいし、われわれの教会と後継者およびその一切の現在と将来の聖俗両面にわたる動産・不動産をあげてここに誓約する。われわれは前記の契約諸事項が完全に実施されるまで、これらの財産が担保として彼らによって所有されることに



同意する。もしこれらの事項のうち、一部または全部が、われわれと教会およびその後継者の利益のために、放棄されるならば、聖俗の諸法令に基く〔修道院の〕請求権 *renounce*、すなわち、聖職位と裁判所に關する特權<sup>(註1)</sup>やすべての慣習法・成文法、すべての勅簡・赦免状・特許状……等、また、教団總會で公布された二日間に関する教令<sup>(註2)</sup>・救済請求およびアポストリック法王管区<sup>(註3)</sup>の書状により、イギリス聖職者は訴訟のためイングランド外に喚問されないことを命じたところの前記管区によるイングランドへの赦免、その他一切の除外規定……これらによって生ずる利益は、われわれと同教会とその後継者が享受するところとなり、前述の商人たちに損害を与え、当該契約にたいし一つの阻害要件を課するものとなる。前記の契約に關しわれわれは自己および教会とその後継者の名において、前記の商人達あるいは彼らのうちの一人またはその代理人により、いかなる場所にも欣んで喚問され裁判に應ずるものである。<sup>(18)</sup>

(註1) これはイングランドの聖職者が寺院裁判所 *Ecclesiastical Court* でのみ裁判をうける特權を意味する。この裁判所はウイリアム一世の創設によるもので、聖職者の主として刑事事件を *Canon Law* に基いて審理した。

(註2) 当時、修道僧は、僧院から二日間以上の日程を要する場所で裁判をうけてはならないとされていた事家を意味する。

(註3) ローマ法王庁を意味する。

この史料の示すように、当面の羊毛販売に關する「前貸契約」は、前掲のウィットウエルの指摘にも拘らず、殆んど無制約といえるほどの広範圍な担保設定を要請しており、この場合、ひとり羊毛のみでなく、広く聖俗両面にわたる一切の修道院財産が、担保物件として商人に委ねられるという事実が注目されねばならない。第二に、この契約の締結に當り修道院の法的特權が大幅に停止または制限されているという事態が重視できよう。右の史料はこの点につ

いてきわめて雄弁な描写を行っている。すなわち、「一」Canon lawとEcclesiastical Courtとによる修道院保護の制限。「二」法王親書によって与えられた特権の停止。「三」教団総会による教令 (decree) の拘束力の失効。等々。そして、こうした諸特権にたいする契約条項の優越は、他方ではCourt of Exchequerの権限を増大せしめ、前述のアーデン修道尼院の事例が示すように、販売契約の履行がこのExchequerの權威に服するという事態に照応するものである。<sup>(20)</sup>このことは、契約成立の端緒をなしている「高利貸付」がまず第一次的に規定していると考えられよう。しかし、当面の段階におけるイタリア商人が、しばしば旧くから「法王庁税」(Papal tax)の徴税権を請負っていた事実からみて、<sup>(21)</sup>法王権が各修道院の羊毛販売にたいしてかなりの規制力を示したと考えることは十分可能である。また、当時イタリア商人が国王にたいして多額の貸附を行っていた事実が顧みられねばならぬ。すでに一二三二年には、ヘンリー三世がフロレンスの商人から一二、〇〇〇マークに達する借入れを行っており<sup>(22)</sup>、また、一二五六年にも、ventaの収入から償還するという条件で新たにシエナ Siena の商人から四一、〇〇〇マークという莫大な貸附をうけている。<sup>(23)</sup>こうした国王にたいする商人の貸附は必然的に商業的特権の獲得を可能ならしめ、関税制度の著しくダイナミッシュな発展とともに、これまた彼らが自己の債務者たる封建領主をExchequer Courtに喚問することのできた有力な条件であったものと思われる。

かくて、担保の無制約な設定とともに、王権と法王権の協合による修道院の伝統的な所領特権の制限、Court of Exchequerによる貿易市場の掌握、等の過程が当面の羊毛販売契約に伴って展開される。われわれはここにあの国家的規模における流通独占機構たるStaple Systemへの見透しを求めよう。<sup>(24)</sup>

〔B〕羊毛分類における商人の主導性

当面の定期販売契約に基いて商品化される羊毛の価格は、シトー派教団等若干の修道院所領の場合には、上・中・下の三つの品質に分類されて個々に決定・契約され、また、その他の所領については、一定品質以下の羊毛を除外したうえ一括して決められていたことはさきにもみたところである。しかし、この羊毛——ときには羊毛自体——の分類についても、商人の一方的な決定権が認められていたといえよう。一例を示せば、「ペゴロッティ・リスト」に、年間一四サツクの羊毛を供給したとされているシトー教団所屬のパイプウェル修道院 Pipewell (Norts.) の場合、その一二九一年に記された契約書のなかに次のような一節が見いだされる。——

「一」修道院の共同の双牙羊 *bidentibus* のうち九〇〇頭については来る四旬節の半ば以前に、商人の監督のもとに、これを二つに分類し、その半分は牝羊、他の半分は牡羊とすること。また修道僧はそれらの羊を商人から借り受け、二つの分類を示す目印を附したのち、各地点における修道僧の双牙羊の場合と同様に、良き修道院所屬の牧草地と羊小屋において、修道院の双牙羊とともに管理すべきこと。……<sup>(26)</sup>

「二」商人の調整人 *preparer* の経費は修道院の負担たるべきこと。彼れは修道僧に妨げられることなく、充分かつ誠実に羊毛を調整すべきこと。商人は、彼れが従業中といえども自由に、出入する権利を有すること。羊毛の調整が終了したのちにおいては、当事者双方は彼れ（調整人）の処置にたいして一部の羊毛を拒絶したり、またその処置にたいして抗弁したりする権利をもつものでないこと（等々）<sup>(27)</sup>。

この「調整人」ないし「選人」は、その経費負担の如何をとわず、商人によって任命または指定されたものであるが、右の引用文に照合した場合、一見、当事者双方に平等かつ公平な分類がなされるかにみえながら、事實は商人

による工作の余地が充分に保証されていることは明白である。したがって、その結果、羊毛価格の実質的な決定に当り、かなりの範囲まで商人の恣意的な操作が介入してくる余地があったということも当然予想すべきであろう。

〔C〕 運搬費の所領負担

前掲のアーデン修道尼院の係争を記録した『Exchequer Plea Roll』にも明示されているように、通常、商人は羊毛集荷についても自己の有利な地点を指定し、羊毛の運搬に要する諸経費を、一方的に所領の負担として指摘される。このアーデン修道尼院は、ソープ Thorp (Yorks.) に羊毛を運ぶべく契約していたが、そのほか、ファントゥンス修道院は前記の契約に際してクリフトンに運搬することを、また、モウ修道院にいたっては至近の地にハルを控えながらも遠くボストンまで、それぞれ「修道院の経費において」羊毛を運ぶことを約している。前段に引用した一二九一年のパイプウェル修道院の契約書も同様な契約事項を含み、毎年六月二四日から三週日以内に、同修道院の羊毛はボストン、クリフトン、ハルの三つの場所に送るよう指定されている。

(15) H. Jenkinson, William Cade, Eng. Hist. Rev., Vol. xxviii: 1913, p. 209 ff.

(16) この禁令は必要に応じて一ヶ年分の羊毛に限り前払金をえて販売することを認めるもので、数ヶ年に又ぶ契約の定期性は未だ承認されていない。長期の販売契約が合法化されるのは一二七九年以後である。この場合、負債の償却のために前貸をうけるという場合に限り、一ヶ年の羊毛生産量を上廻る前払金の受納が認められた。Cf. Denholm-Young, op. cit. p. 35.

(17) Whitwell, op. cit., pp. 25—6.

(18) Wroot, loc. cit., p. 15. なおこの史料に付された(註)についても同様。

なお、こうした羊毛販売に関する契約書は、素朴な形態をとるとはいえ既に信用貨幣としての機能を帯び、商人相互間に流通していた事実がみられる。例えば、一二八四年、ファントゥンス修道院がイタリア商社リコマンニとの間に作成した三ヶ年(六年サック、一サック当り六マーク)の契約書は、モントイ商會が買取つてゐる。Denholm-Young, op. cit., p. 54. こ

うした修道院長の振りだす「署名債務証書」(Chirograph)の広範な流通は、本来、封建社会における宗教領主の圧倒的な信用の高さに基くものであり、彼の信用は總じて教会の「Hierarchy」と戒律によって保証されていたが(M. Weber, *Wirtschaftsgeschichte*. 1924. S. 197.)「インマンチンツ」は「カトリックCourt of Exchequer」への登記によって二重に裏づけられぬ形をとりつた(Whitwell, *Ibid.*, p. 28)。

(19) このような債務の総額から制約されることのない前近代の土地に関する担保設定は、十七世紀以降「衡平法上の受戻権」(equity of redemption)の發達が債務者の地位を改善し、大法官裁判所の保護に委ねられることにより、制度的に克服されてゐる。Cf. C. H. S. Fifoot, *English Law and its Background*. 1932. 伊藤正巳訳「イギリス法(その背景)」一六四—三〇四頁以下。

(20) 例えは Hall (ed.), *op. cit.* pp. xix, xxvi—vii, etc.; Whitwell, *op. cit.*, p. 28.

(21) Power, *English Wool Trade*, pp. 53 seq.

(22) *Cal. Pat. Rolls* (1231—4), pp. 514—15.

(23) K. S. Mitchell, *Studies in Taxation under John and Henry III*. 1914. p. 279; Denholm-Young, *op. cit.*, p. 63n.

(24) 例えは Exchequer Court によるこの販売契約の履行についてはしばしば「sheriff」が活発な動きをみせる事実をみよ。例えは Whitwell, *op. cit.*, p. 25. に引用されたリカルティ商社の手代二名の書簡を参照のこと。「Staple System」の成立については Power, *op. cit.* Chap. V; T. F. Tout, *The Place of Edward II in English History*. 1914, Chap. VII. esp. pp. 241 seq. 等をみよ。また大陸における「Stapelzwang」については Weber, a. a. O., SS. 194—195 をみよ。

(25) Pippuelle la buona mar. 16. e Ita majona mar. 12. il saccho, e annone da 14. saccho per anno. (Cunningham, *op. cit.*, p. 633)

(26) Donkin, *op. cit.*, p. 4. loc. cit.

(27) *Ibid.*, p. 7. loc. cit.

(28) 前掲のアーデン修道尼院では調整人は商人の負担とされている(本稿一三三頁)。

- (29) Hall (ed.), op. cit., p. 69.
- (30) Wroot, op. cit., p. 15.
- (31) Whitwell, op. cit., pp. 24—5, 28n.
- (32) Denholm-Young, op. cit., pp. 56—7.

以上により、当面の定期販売契約に際する商人のイニシアティブがいかにして成立しかつ維持されていたかはほぼ明かとなる。十三世紀末葉には、各所領は多かれ少かれ各々の商人にたいするかなりの負債を計上しているが、その年の著しい変動が物語っているように、<sup>(33)</sup> こうした所領経済と貿易市場との接触は、一方では、領主経済のため巨額の貨幣的利益をもたらしたが、他方、所与の所領における生産と流通に関する諸事情の如何、とくに直営地での羊毛生産と市場を媒介するこの定期の前貸契約の内容如何によっては、所領経済のうえに著しい財政的な負担を課することになったものと思われる。<sup>(34)</sup>

(33) 例えばファウントゥンス修道院の負債に関する次の数字をみよ。

一二七五年六月	六、三七二磅
一二九〇年	一、二九三磅
	(Wroot op. cit., p.13)
一二九一年	六、四七三磅一〇志六片
一二九三年	三、五三四磅一四志三片
一二九四年	三、五三三磅一二志一・五片
	(Denholm-Young, op. cit., p. 55n)

また、カークストール修道院の累年の負債は次のとおりである。

一二七八年	〔四五〇〕マーク
	〔六七〇〕マーク

一二八四年

五、二四八磅一五志七片  
(他に羊毛五九サック)

一三〇一年

一六〇磅 (Denholm-Young, op. cit., p. 61)

その他、ウィットウェルの示すモウ修道院の負債の変遷過程 (Ibid., pp. 29—31)・世俗領に関するデンホーム・ヤングの描写 (Ibid., p. 64) 等のみよ。なお、かかる商人よりの借入金には当然のことながら羊毛の販売を伴わぬ單純な債権も含まれてい<sup>る</sup>。(cf. Whitwell, op. cit., p. 30)。

(34) 第三節で取扱われた問題のうち、Court of Exchequer 等によって担われる国王裁判権が、中世貿易市場の展開に応じて徐々に伸長してくる過程は、封建的市場構造への理解はもとより、絶対王制成立の問題に関連してきわめて重要な意義をもつものであるが、この点に關しての論述は別稿に譲りたい。また、本来の「普通法」や「衡平法」から區別された「商人法」(Lex mercatoria)——商慣行に基づく商事法——の果した歴史的機能についても同様にここでは触れないでおく。

#### 四 領主による羊毛の転売体系たる「collecta」と「讓渡利潤」の掌握

貿易市場との接触により当面の地域における所領の流通機構を問題にする場合、さらに一つの重要な事実の存在を指摘しなければならぬ。それは「collecta」という史料的表现を有するところのもの、すなわち、領主が貿易商人への転売を目的として自ら多量の羊毛を購売する行為の存在である。

「一」「領主の商人的営み」といわれるこの種の転売行為は、遙か十一世紀中葉にまで遡ってその存在を指摘することができる。一一五七—八年、シトー教団は『われわれが購入した羊毛』を販売することを禁じ、その後一一八一年にも同様の布告を各修道院に発している。<sup>(1)</sup>かかる禁令は本来修道僧俗人と接触する機会を防ごうとする教義的要請に由来するものであるが、多くの事例が示すようにしばしば経済的要請が教義的要請に優先し、禁令の遵守を妨げていたものと思われる。この「collecta」について先駆的な研究を行なっているウィットウェルは、さらにこうした

禁令の頒発を招いた原因として、近在の都市商人の非難を緩和しようとする教団の政策的意図をあげている。<sup>(2)</sup> 事実へンリー三世にたいする一二六二年のリンカン市民の提訴にも示されているように、修道院の *collecta* は『教団の威信に反する』とともに『国王の都市リンカンやその他当州の商業都市の荒廢に』帰結するものとされた。<sup>(3)</sup> しかし、こうした客觀的諸条件にもかかわらず、修道院による羊毛の転売を目的とする購売は留めがたく普及していたのである。

まず、われわれは一二七五年リンカンにおいて作成された「陪審報告」(Inquisitions)の一節を通じて、かかる修道院の *collecta* の実相を捉えることにしよう。――

『シトー教団やセムプリンガム教団の俗人修道士は、過去十五年間公共の正義を紊亂してきた。何故ならば、カークステッド、Kirkstead、リヴェズビー Revesby、ラウス・パーク Louth Park その他の僧院のシトー派修道僧たちは……自らこのリンカンシャー全体の羊毛その他の商品を購入し、それをこの州のあらゆる大市や週市<sup>フェアマーケット</sup>まで運搬し、そこでランドルやその他の海外の商人に販売している。それは、修道僧たちが商人から前払いで現金を受取つていたためである。また彼らは正義と自己の教令に反して国王の利益にもとり、年間一〇〇マークに及ぶリンカイン市の損害を齎らした。……』<sup>(4)</sup>

修道院が転売を目的として羊毛の活発な買付けを行っていたことはこの史料の記述からも余すところなく捉えうるのであるが、それと同時に、かかる羊毛の購人を促がした直接の動機が、前述のような *arrha* であったことも明かに示されている。いいかえれば、当時、修道院は一般に、その羊毛の販売契約を結ぶ際、しばしば自己の直營地の生産



能力を上廻る羊毛の引渡しを契約していたのである。<sup>(5)</sup>あのフォーティバス家のホルダーネス所領がリカルディとの契約に基いて羊毛を販売した際に、一二六八―九九年に四サックを二二ポンドで購入して契約量の不足を補っているが、かかる小規模かつ補充的な羊毛買付はむしろ例外的であろう。<sup>(6)</sup>後段に示されるポールトン修道院の事例とともに、モウ修道院に関する次の史料の一節は、修道院による羊毛買付の規模について判断を下す手懸りを提供する。――

『……一年前<sup>(註)</sup>われわれ〔二名のリカルディの手代〕はボストンの大市でモウ修道院の僧院長から一二〇サックに及ぶ彼の<sup>(7)</sup>collectaたる羊毛を購入し、これにたいして一、二〇〇マークのスターリング貨が同じ大市において彼れに前払いされた。……』

(註)「一年前」としてゐるのは当然前払いした時期を指すもので、これは明かにこの筆者の誤記である。(Whitwell, Ibid., p. 25n)

さて、このモウ修道院のcollectaたる羊毛一二〇サックという量は、この修道院の一年間の生産しうる羊毛の量に比してどうであつたか。正確な計算は期し難いとはいへ、右の史料とほぼ同じ年代〔一二七〇年代の後期〕の史料は、<sup>(8)</sup>当時この修道院が一二、〇〇〇頭前後の羊とhorned cattle一、〇〇〇頭を擁していたことを明かにしているが、この羊の保有頭数は年間を通じて四〇乃至七〇サックの羊毛を生産する程度と思われ、<sup>(9)</sup>前記のcollectaの約二分の一に当るにすぎない。この計算はもちろん史料的な信憑性は薄いが、一二八〇年のExchequer Memoranda Rollが、同年collectaたる羊毛(量不詳)をリカルディに販売し、他方、修道院に直屬する所領の羊毛一〇八サックをチェルキイに売却する契約が行われた事実を示しているが、<sup>(10)</sup>この数字との比較もまた重要である。

- (1) Whitwell, op. cit., p. 8. 同様な禁令はギルバート派教団についてもみられる。なお、この教令に違反した修道僧は罰せられ聖墓が停止されることになっている。
- (2) Ibid., p. 9.
- (3) Rot. Parliam. I, 156—7, cited by Whitwell, Ibid., p. 9.
- (4) Rot. Hundred, 1812, I, 317, cited by Whitwell, Ibid., pp. 9—10. なおこの陪審裁判はリンカン市民の勝訴となり、以後リンカンシャーにおける《collecta》は禁止されるにいたる。しかし、一二八五年国王の特許状を得て三ヶ年に限りカークステッド修道院はこの州内で羊毛の購入を行なっているが、一三〇二年、さきの判例の遵守を勧告するよう市民が請願した事実があり、違反件数がいかに多かったかを示唆している(Whitwell, Ibid., p. 10)。
- (5) ここで想起されるのは第二節で分析した「ヌロロッチェイ・リヌト」であろう。当史料には各修道院所領の「年間供給量」が示されていた。しかし、この項目がそれぞれの所領における当時の「生産量」を意味するものか、バルデイが彼れヌロロッチェイを通じて契約した量であるかは明瞭でない。しかし、ルートもデンホーム・ヤングも、その恒常性に着目し「年間生産量」に最も近い数字として取扱っている。
- (6) Denholm-Young, op. cit., p. 60.
- (7) Letter from Baronino Galteri & Riccardo Guidicioni, merchants of Lucca, to Sir John de Kirkby, in: Ancient Correspondence, X, 114, cited by Whitwell, op. cit., p. 25. なお、同修道院の《Chronicle de Melsa》には『この僧院長ロバートは、一度に、一二〇サツクの羊毛を八〇〇磅(一、二〇〇ポンド)の支払手形を与えてルッカの商人たちに販売した』と記されている(Whitwell, Ibid., p. 25)。
- (8) この史料は前掲の《Chronicle de Melsa》による(Ibid., pp. 24—5)。
- (9) これはデンホーム・ヤングがフォーティヌス所領の事例から推算したものである。(Denholm-Young, Ibid., p. 54)
- (10) Whitwell, op. cit., pp. 28—9. なお、一二七四年一月一日、この修道院がホヌトンの大市で一二九サツクの羊毛を販売していたことが《Inquisition for Hundred of Hartill》に記載されており(Ibid., p. 25)、『モウ修道院の生産量ははこの水準であったように思われる。』

〔二〕 以上により当時の領主経済にみられる羊毛の転売体系の実態はほぼ明かになったものと思われる。とくに、ここで注目すべき点は、商人との契約のなかに明示される羊毛の販売量が、当該所領の直營地群の生産量を一般に凌駕し、その結果、領主は、自律的にあるいは他律的に、自ら農村乃至都市の市場から羊毛を購売し、それによって一般にその差額を補填していた事実である。このような領主による「collecta」は、当面の地域はもとより、広くミッドランド地方等の事例も示すように、きわめて普遍的な現象と見做すことができよう。例えば、レスター修道院 Leicester Abbey の一二八六年の「accounts」によれば、その年、ポストンにおいて二六サックの羊毛を一サック当り二二マークの価格で販売し約二〇〇磅を得ているが、他方では、近在の小生産者から総額において一八八磅一七志五片にのぼる羊毛を購入していることが記録されており、ポストンで売られた羊毛のうちかなりの部分は「collecta」たることを示している。また、一二九七―八年の「account」には、一サック当り八マークの価格で四サックをレスターの商人ル・マーサー Le Mercer に、また一サック当り二二マークの価格で一六サックをバルデイにそれぞれ販売し、総計約二二〇磅の貨幣収入を得ている事実がみられる。この二二〇磅は同年における修道院総収入の三五パーセントを占め、穀物販売の二七パーセント、地代収入三三パーセントを凌ぐ最大の収入項目となっているが、この点からみても同修道院の「collecta」のもつ所領財政上の意義はきわめて大きいといわねばならない。<sup>(11)</sup>

当面のヨークシャーについてはこの点に関する十分な考証はなしえないが、「collecta」による収益が所領経済のうち如何なる比重を占めていたかについては、一例を掲げて具体的に検討することができる。すなわち、一二九八―九年度に作成されたボルトン修道院 Bolton-in-Warfedale (Aug. Ord.) の「account」がそれである〔次頁の表〕。収支の比較を便ならしめるために「Rectoria」と「Excursus」を左右に分類したが、その場合、とくに注

Bolton Priory Account (1298—99)

(RECEPTA)

Arrears received	55s. 10 <sup>1</sup> / <sub>4</sub> d.
Farms of Land	£ 77 19s. 0 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> d.
Farms of Mills	£ 31 16s. od.
Works releaed (Emsay)	77s.
Market tolls of Fair Emsay	£ 8 11s. 8d.
Debts received	£ 19 19s. 4d.
<b>Sale of Wool</b>	£ 289 4s. od.
from John Rescevont & his fellow.	£ 20
from the same, for 29 sacks of wool (collecta ?)	£ 260
for lockets and refuse wool	£ 9 4s.
Sale of Stock	£ 19 13s. 10d.
Sale of Corn	£ 6 6s. 0 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> d.
Receipts by loan from merchants.	£ 359 3s. 4d.
from J. Resceevont & Co. after receipt of wool	£ 60.
from the same at Boston fair.	£ 22 3s. 4d.
from the same at London	£ 26
from the same by other hand.	£ 51
from Bernardo Manfredi	£ 200
(n. g.)	

Total Sum of All Receipts £ 865 17s. 6 <sup>3</sup>/<sub>4</sub>

(EXPENSA)

Farm paid	£ 4 5s. 9 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> d.
Pension paid	£ 14 14s. 8d.
Debts paid	£ 275 8s.
to J. Recevont	£ 206 included
Purchase of Corn.	£ 69 5s. 5d.
Purchase of Horse (goats included)	£ 15 18s. 1d.
<b>Purchase of Wool</b>	£ 195 4s. 3d.
for 28 sacks, 3 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> stone of wool bought.	
Kitchen expenses	£ 46 9s. 3b.
Repair of Houses	£ 30 2s. 8 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> d.
Repair and Making of Plough	6s. 6 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> d.
Cost of Sheep	£ 9 9s. 3 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> d.
Purchase of Meadow	£ 6 10s. 4d.
Threshing & Winnowing	£ 10 2s. 2 <sup>3</sup> / <sub>4</sub> d.
Collection of Tithe	102s. 1 <sup>1</sup> / <sub>2</sub> d.
Wage outside the Court a foreman & 4 foldman	£ 10 18s. 6d. 11s. 6d.
(n. g.)	

Total Sum of All Expenses £ 841 18s. 10<sup>1</sup>/<sub>2</sub>d.

(Remarks)

Debts which the house owes	£ 427 4s. 4d.
to Rescevont	£ 159 3s. 4d.
to Manfredi	£ 200
Sheep	627 wethers
	600 ewes
	500 hoggets
total	1727

(Abridged from A. H. Thompson, History and Archtectural Description of the Priory of St. Mary, Bolton-in-Wharfedale. Thor. Soc. Publ. Vol. XXX, No. 67. 1928. pp. 116-29)

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤(続)

目を引くところは、まず「Expensa」のうち、二八サック三分の一ストーンの羊毛が、約一九五磅で購入されたことを示す項目である。また「Receipta」の欄に目を転ずれば、ジョン・レセヴォント John Rescevoent なる商人に二九サックの羊毛が約二九〇磅で売却されたことが示されている。この二つの項目はこの年ポールトン修道院が転売のために羊毛を購入していたことを明かに物語っているといえよう。そしてこれによる貨幣収入二九〇磅は、同所領最大の収入項目として他のそれを圧倒的に凌駕している。いま、羊毛に関する収支の計算をするならば、約六五磅の差額が得られる。この差額は明かに「collecta」によって修道院が取得した「讓渡利潤」<sup>(2)</sup>を意味するものであるが、これが当該所領における総地代収入七八磅に迫まる第二の重要な収入源であったことを看過すべきではない。

この修道院が如何にして羊毛を購入していたかは遺憾ながら史料に即して確認することはできなかった。しかし、さきのレスター修道院の事例を念頭にするならば、ここでも近在のローカルな小市場を通じて、小生産者層からその羊毛を買入れていたことは殆ど疑いえないところである。事実、「Calendar of Charter Rolls」の示すところからも明かなように、このポールトンの「accounts」<sup>(3)</sup>が作成された十三世紀の末葉には、少くとも大小併せて七四箇所の市場がヨークシャーの全域にわたって存在している。<sup>(3)</sup> こうした市場のうち、大半のものは、近在の需要を充足するために、羊毛、木材、穀物、家畜等が「manorial court」の權威のもとに取引されるという性質の小市場であった。<sup>(4)</sup> かかるローカルな小市場の抬頭は、もとより基本的には、この地域内での私的生産諸力<sup>(1)</sup>社会的分業の発展を促しつつ、漸く自己の経済を『小商品生産』として再編成するにいたった生産者層の経済的成長を告知するものである。しかしながら、当面の段階におけるローカルな小市場は、当時貨幣地代がなお一般的な地代形態として全国的規模において成立するにいたらず、依然として労働地代や生産物地代を広範に残存・再出せしめていた事情に対応し、これ

に適合的な狭隘性をもつものであったし、また、まさにかかる封建的諸規範によって枠づけられた狭隘性のゆえに、あの羊毛の「collecta」に示されるような「領主的流通独占」のための恰好の土壌として位置づけられたものといえよう。<sup>(6)</sup> われわれは、かかる事実のうちに、「商品流通」もまた領主経済の内部にきわめて「形式合理的」に編成された一例をみいだしうるであらう。

(11) R. H. Hilton, *The Economic Development of some Leicestershire Estates in the 14th & 15th Centuries*, 1947, pp. 27, 31—3.

(12) このような場合、かかる封建的な「讓渡利潤」が、基本的には、当面の段階における貿易市場と局部的市場という性格を異にした二つの市場間の価格差を前提し、そこから抽出されたことは明かである。前者においては、さきにも触れたように商品の価格を決定するのは殆んど専ら偶発性に依存するものである。K. Marx, *Das Kapital*, Bd. III, XX, S. 361. etc. しかし、後者にあつては、特定商品の価格はその生産費を基軸として運動する傾向を示す。このことは、小商品生産者は自らの労賃部分と僅少な費用を補填しうる価格で、したがって、「蓄積部分」を予定することなしに容易に商品を販売できるといふ事情に照応する。また、初期の貨幣地代給付農民のものには、市場の狭隘性に規定された支払手段の慢性的な不足状態がうまれるという事実も、この種の「讓渡利潤」を目的とする領主の低価格による大量の買占めをヨリ一層容易なものにしたといわなければならない。この市場の対蹠的な性格に関しては、さしあたり、大塚久雄「資本主義社会の形成」(続)(弘文堂『社会科学講座』第六卷「社会問題と社会運動」所収)にみられる簡潔な問題点の提示をみよ。

(13) K. L. McCutcheon, *Yorkshire Fairs and Markets*, Thores. Soc. Publ. Vol. XXXIX, Appendix I, esp. pp. 16—15. なお、便宜上、その一部である一二二七年から一三五〇年にいたる市場特許の記録を末尾に付表として収録しておく。なお、これらローカルな小市場の検出と構造分析については、米川伸一「中世イギリスにおける『農村市場』の成立」「社会経済史学」(第二三卷第三号)、および、船山栄一「社会的分業の展開と小ブルジョア経済の形成」(法大『社会労働研究』第十号)、等が興味ある論述をみせている。また、当面の羊毛に関する国内市場の深化に関しては、あのキャラスウィルソンの秀れた先駆的業績が鋭く指示したように、十三世紀における「falling mill」の導入を契機とする毛織物工業の北西山間部への劃期的な移動がきわめて重要な促進要因であったことを銘記すべきである。E. M. Carus-Wilson, *An Industrial Revolution*

in the 13th Century. Ec. H. R., Vol. 11, No. 1, 1941; ditto, The English Cloth Industry in the 12th and 13th Centuries. Ec. H. R. Vol. XIV, No. 1, 1944.

(14) たゞや、W. P. Bailden (ed.), Court Roll of the Manor of Wakefield. Yorks. Arch. Soc., Record Series, Vol. XXIX, XXXVII, 1901, 1906, esp. Vol. ii, pp. 1, 6, 8, 36, 42, etc. に現われる商品取引の内容をみよ。

(15) 市場は、基本的に商品生産の範疇であり、その再生産構造を意味するものとすれば、その大いさゝ広さといった量的契機はその実存条件たる社会的分業の進展度に照応するものである。このことは、視角をかえてこれを封建制から資本制への移行の問題として把える場合、共同体規制およびそれに立脚する封建的諸規制が、市場発展の限界を形づくり、その狭隘性を決定しているといえよう。こうした市場の狭隘性を前期的資本の取得する「讓渡利潤」および「高利」の固有の地盤である。レーニン「らむゆる市場問題について」(「全集」第一卷九二頁以下)。K. Marx, Das Kapital, Bd. III, XX, SS. 361-363, XXXVI, SS. 645-649, etc.

(16) なお、この点絶対王政下にみられる地主による「流通独占」と比較せよ。国内市場の成熟度や遠隔地貿易の構造が異なるため、単純なアナロジーを想定することは勿論誤りであるが、そこにもまた、下からの小生産者層の自由な商品生産 $\parallel$ 流通を阻みつつ、これを首都経済圏の一環として、隔地間商業のための特産物市場たらしめんとする領主的 $\parallel$ 地主的流通独占の存在がみいだされる。この問題については、田中豊治氏の論稿『イギリス絶対王制下における地主制の動向』(「歴史学研究」第二〇九卷所収)が興味深い分析を行なっている。

## 五 結 び

これまでわれわれは「*artha*」と「*collecta*」をいわば二つの座標点として措定しながら、十三世紀における羊毛輸出貿易の重要な生産的基礎であったイングランド北西部の封建的土地所有(「 $\parallel$ 非荘園的所領」)とその固有の市場構造について検討を試みてきた。その場合、つねにわれわれの念頭にあったものは、あの『ますます交換価値を自

ととする性格を生産に与え、生産物をますます商品に転化させる作用をする』<sup>(1)</sup> ところの商人資本と商業の発展が、イングランドにおける封建的土地所有の解体過程に、また、その基礎をなす「小商品生産」の自由かつ広範な展開の過程にどのような関連をもち、いかなる作用を果していたか、という問題であった。そして、こうした研究上の要請に基づいて行われた若干の操作から、十三世紀における北西部の「非荘園的所領」の示す貿易市場への「対応的」経済構造について、われわれは以下のような見透しを得ることになった。

〔一〕十三世紀という当面の段階では、イギリス産の羊毛が隔地間貿易の素材として商品化されていく過程は、多くの場合、外国商人と領主層との間に結ばれる定期の前貸契約によって支えられていた。商人に即していえば、貨幣の前貸による独占的買占の体系が封建的土地所有を包摂しこれを支配するという形態こそ、まさしくこの「好況期」における羊毛輸出貿易を特徴づけていたものである。また、この「前貸支配」を側面から支持するものとして、法王権や初筈からかなりの「集権性」を獲得していた王権が、それぞれの角度から重要な役割を果していた事実が指摘され、それらの集約的な成果として、契約条件における商人のイニシアティブが保証され、「普通法」<sup>(2)</sup> に基づく所領特権の大幅な制約が行われていくのであるまいか。

〔二〕当面の「非荘園的所領」が遠隔地貿易との接触によって形成する流通機構は、その基礎過程において二重の構造をとる。すなわち、主たる生産の基礎はいうまでもなく領主直営地における大規模な牧羊経営であったが、なおそれへの補充的構成部分として、ローカルな市場を通じて広く農民の牧羊経営をも編成し、明かに自己の転売体系(「流通独占」)によって彼らの羊毛をも貿易市場に投入していた。そして、自律的にせよ他律的にせよ、領主は商人との契約によってこの流通機構の二重性を恒常化し、自ら高額の「譲渡利潤」を抽出・掌握しつつ、小生産者の



うえに新たな桎梏を課するものとなった。しかしながら、こうし当面の流通機構がローカルな市場の未成熟に狭隘性を一方の存立要件とする限り、「小商品生産」の自由な展開に対立する性質のものではあるまいか。

(1) K. Marx, Das Kapital Bd. III, XX, S. 358.

(2) イングランドにおける封建王政の特異な「集権性」に関しては、さしあたり、矢口孝次郎「イギリス封建社会経済史」第三章、および、藤原浩「イングランド初期王政——ノルマンおよび初期プランタジネット朝——」(遺稿集「イギリス経済史研究」所収)等にもみられる研究史の紹介と批判を参照されたい。

以上が、われわれの余りにもささやかな分析から導かれたところである。いうまでもなく、こうした所見はいささかも試論の域を出るものではない。しかし、それにも拘らず、中世イングランドにおける羊毛輸出貿易の発展こそ「マナー体制」の解体とあの早熟的な「小商品生産」の発展にとって重要な促進的要因であったと強調する所説にたいしては、かかる主張がなされるに先だって、なお検討を要する幾つかの重要な事実のあることを指摘しえたものと思われる。

#### 〔補説〕 保坂栄一氏の批判に寄せて

かつて保坂栄一氏は、前掲の論稿「中世イギリス牧羊業の展開」のなかで、筆筆の旧稿(本誌第九卷第二号所収)に触れられて次のようにいわれた。『最近、近藤晃氏は「……イギリス・マナーの流通機構」と題する論文のなかで白杉庄一郎教授を批判し、同教授が近代資本主義の前提としての農奴解放の客観的条件の一つとして商業・外国貿易の発展を考え、かかる商業の発展はイギリスにおいては羊毛および毛織物の輸出を中軸としたと考え「るといふ」……叙述を展開されたのを、「独特の『論理』の展開」であるとして拒否されるが、白杉教授のかかる敘述と論理は決して独特のものではなく、寧ろかなり、一般的な見解といえる』ばかりでなく、白杉教授の見解こそ『農業における資本主義形成の歴史的前提の分析に貴重な成果ある分野へ連なり得ることと思われる』(原文のまま)として大いに讚美しておられる(前掲「紀要」第八輯三―四頁)。

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤(続)

筆者にたいする保坂栄一氏の批判は幸いにも次の点で唯一の妥当性をもつことに成功している。それは、白杉教授が開陳された見解が決して教授独自の「独特の『論理』」ではなく、実は保坂栄一氏というすぐれた同調者に恵まれていた事実を明かにしたことである。この意味では、白杉教授の所説はたしかに本邦においてすら『かなり一般的』である。しかし保坂氏は白杉教授の理論をどこまで正確に理解し私淑しておられるのか。この点、氏の行論からは何ら明かになしえない。念のために、白杉説の骨子を記せばこうである。すなわち、イギリスにおける農奴制「マナー体制が全機構的に克服される過程、換言すれば「金納化」から「独立自営農民」の生成にいたる過程の進展にとつて、『羊毛および毛織物の輸出を中軸とする外国貿易』は、その『少くとも客観的条件の一つ』——ここでは多元的表現が用いられている——として促進的に作用したばかりでなく、とくに北西部の牧羊地帯では貨幣地代成立の『最も根本的な原因』であった、と。しかし、白杉教授はかかる主張をされる論拠として、僅かに次の二点を掲げられたにすぎない。第一は、牧羊経営が穀物生産に比較して極めて僅かな労働力をもつて賄いうるということである。したがって、羊毛輸出の増大は直営地経営における牧羊経営の増大およびその穀物生産との交替を招来し、その結果、不要となった賦役労働は必然的に「金納化」される、というのである。また、第二の論拠として、当時イギリス産の羊毛や毛織物が遠隔地貿易の発展によって「国際商品」として広く流通した事実が提示されている。なぜならば、白杉教授は流通過程が空間的に拡大することこそ『近代社会の本質的特徴たる世界的性格』の現れにほかならないと判断されたからである。したがって、教授にとってはこうした外国貿易と市場に密接な関係をもつことによつて『領土が商業化し』たならば、『マナー制度が変質』、『解消』していくのは自明の理だったのである。こうした白杉教授の所説は、事実認識において著しく杜撰であるばかりでなく、すでに明敏な多くの読者によつて察知されているように、その分析視角もまた根底において『歴史学派的』であり、ビュッヒャー理論の痛ましい再版形態にすぎない。保坂氏の賞揚される理論とはかかる代物である。氏がそのいずれの点に賛成されるのか、われわれは改めて問わねばならない。われわれがさきに白杉教授の所説を『独特』のものとして評したのは、いうまでもなく、かかる個人的な論理の発展系列を指したものであつて、類似した結論をジャーナリスティックに探しまわつた結果とはおのづから性質を異にしている。われわれの分析からは『白杉教授のかかる敘述と論理は……寧ろかなり一般的な見解といえる』などという結論は到底うまれない。保坂氏がもう少し注意深く白杉氏の所説を検討されたならば、このような無駄な（註）を設けて自分の論文を漕ぎたい混乱に導くという愚拳を未然に防がれたであろうし、白杉教授の同調者としての榮譽を担うことにも躊躇されたであろう。また保坂氏は、われわれが旧稿において『牧羊マナー』と『穀作マナー』はおける賦役量の比較を行ったことについても次の

ようにいわれる。『白杉教授が、羊毛輸出の發展が比較的賦役を多く必要としない牧羊経営を増大させたことを重視するのに對し、近藤氏は牧羊経営もまた羊の洗浄・剪毛のために可成りの賦役量を必要とすることを指摘し、……場合によっては牧羊マナーの賦役が、特定の穀物生産マナーをも凌ぐ賦役水準を示すこともあり得たとして、白杉教授の見解を否定されているが、この近藤氏の見解は必ずしも妥当ではない。』と。そして、牧羊のための賦役は主として「プレカリアエ」(precariae)として徴収されたこと、牧羊マナーといえども皆耕地を有するため屢々賦役が重く課せられたこと、の二点を強調し、『根本的な点は、牧羊における賦役労働の意味の減少と、牧羊は少額の費用と少量の労働しか必要としないということ……が問題なのであって、農民一人に課せられる賦役量を製作マナーと牧羊マナーで比較してみることは殆んど意味がない。』(五頁)といわれる。しかし、保坂氏は筆者の記したところを正しく理解しておられない。氏は、われわれが牧羊経営のもつ少額の費用と少量の労働で足りるという技術的な性格を否定しているものと解しておられるが、問題の旧稿八九頁の(註2)は決してそのような平板な問題について論じたものではない。そこにも明記してあるとおり、この(註)は、当面の牧羊経営の増大は「金納化」の終局的達成、体制としての農奴制の揚棄を『何ら説明しうるものではない』こと、また、『製作マナー』、『牧羊マナー』などという低俗な所領類型論がいかに無意味であるかを示したものである。われわれの論述に若干の不備はあるかもしれない。しかし、この(註)の意図が奈辺にあるか、少しでも旧稿全体の趣旨を知ることができたならば、誰しもたちどころに理解できたはずである。牧羊経営の技術的な性格、とくに所要労働力の問題に関しては、ことさらに教科書的な数字を示されるまでもなく、われわれは保坂氏はおるか白杉氏にも賛成である。しかし、そのことは白杉教授のシェーマを承認することは全く別のことである。さらに注意すべき点は、白杉教授の理論からは、僅かに領主のイニシアティブに基づく「金納化」のみが説明されうるにすぎず、農民経済の「小商品生産」への移行、「共同体」からする私的生産諸力(＝分業)の自立化、等の基礎的な過程については、同教授の『獨特の『論理』』を以ってしても依然として明かにされえないことである。白杉理論の致命的な欠陥はまさにこの点にあり、それは「金納化」の何たるかを知らぬものの業であるといつてよい。賢明な保坂氏はこの点で白杉氏と無意識に、別の説明をしておられる。そして、(一)十三世紀後半においてすら農民の飼育する羊の数は領主のそれに決して劣らなかつた事実、(二)『農村に住む商人』なる姿をとつた羊毛仲買人が十三、四世紀当時外国商人やステイブラーズの直接買付をしばしば代行し、農民の羊毛が商品化される過程を媒介していた事実——この二点を掲げて「金納化」と羊毛輸出の相互作用を説明しようとする(例えば二五―六頁、二八一―三二頁)。しかし、こうした保坂氏の立場は、「農民」を意識した結果、かえって収拾のつかない

混乱に陥いつている。第一に、『領主の商業化』過程に「金納化」の基本線をもとめる白杉教授を、ともかくも農民的貨幣経済の発展を強調する保坂助教が擁護するという矛盾が指摘される。それだけではない。「金納化」が留めがたく進行していた十四世紀後半にあの羊毛輸出貿易はまさしく逆に急激に衰退しつつあったのであるが、白杉教授はこれを全く無視されていたのたいして(白杉説が事実<sup>に</sup>背馳する一つの例証)保坂氏はこれを知りながら、十五世紀における毛織物輸出の抬頭という段階を異にした事実を手懸りとして、なおかつ白杉説に同調しておられるのもまことに奇怪である。このような混乱が何故生じたのであるうか。要するに、保坂氏は中世の隔地間貿易と局地的小市場(Ⅱ国内市場の萌芽形態)との市場構造の範疇的差異に気付かず、それをせいぜい空間的な差異として理解されたに留まったからである。だからこそ、原毛のまま輸出されようと毛織物として輸出されようと、保坂氏にとっては、農民の羊毛が羊毛仲買人の手を経て国際的商品となりさえすればそれでよかつたのである。このことは、保坂氏が直営地における牧羊経営と農民のそれとを単に異なつた生産のタイプとして意識されているにすぎず、両者の深刻な対抗関係については、一片の考慮さえ払っておられないことによつても明かである。商業ないし商品流通は、主体的に能動的ではなく、つねに自己の拠つてたつ再生産構造の如何によつて、他律的にその歴史的性格を決定するものである。流通過程の空間的な拡がりの如何は、その本質とは断じて無縁のものである。この点、保坂氏の反省を切に期待したい。

〔一九五四年二月二〇日脱稿〕  
〔一九五四年九月一八日補筆〕

〔付記〕 本稿の論旨の主要部分は昭和三十三年度土地制度史学会秋季学術大会において報告されたものである。

## Grants of Yorkshire Fairs and Markets in the Calendar of Charter Rolls

[A. D. 1227—1350]

Explanation.—Place-names are given in their modern form, followed by the Riding and occasionally the parish or other aid to identification. The form of the name in the grant is added in round brackets if the difference is considerable.

Names nowlost are printed in italics.

The abbreviations V.F.M., singly or together, are used for the Vigil, Feast and Morrow of the specified saint's-day; and V.M. for Virgin Mary.

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1227	Walshford, par. of Ribston W. R.	Brethren of the Temple	Fair on V. F. of St. John the Baptist and two days following (June 23-26) Weekly market on Tuesday
1227	Selby W. R.	Brian de Insula & Grace his wife	Fair on F. M. of St. Margaret (July 20-21) Weekly market on Wednesday
1227	Otley W. R. (Ottele)	Walter, Archbishop of York	Fair on V. F. of St. Mary Magdalen (July 21-22) Market on Monday
—	Sherburn W. R. (Sireburn)	Walter, Archbishop of York	Fair on V. F. of Exaltation of the Cross (Sept. 13-14) Market on Friday
1227	Kilham E. R. (Killum)	Church of St Mary of Rouen, and Dean and Chapter	Fair on V. F. of Laurence (August 9-10) Market on Tuesday
1232	Whitgift E. R.	Robert, Abbot of St. Mary's, York	Fair on V. F. of St. Mary Magdalen (July 21-22) Market on Thursday
1239	Otley (See above 1227)	Walter, Archbishop of York	Fair on V. F. of St. Mary Magdalen (July 21-22) Market on Monday
—	Sherburn (See above 1227)	Walter, Archbishop of York	Fair on V. F. of Exaltation of the Cross (Sept. 13-14) Market on Friday
—	Brough E. R. (Burgh on Humber)	Walter, Archbishop of York	Fair on V. F. of St. Matthew (Sept. 20-21) Market on Thursday
1240	Richmond N. R.	Peter of Savoy	All Previously granted liberties of the honour

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1245	Bowes N. R.	Peter of Savoy	Fair on V. F. M. of St. Martin (Nov. 10-12) Market on Tuesday
1245	Pocklington E. R.	William de Fortibus, Count of Aumâle	Fair on V. F. of St. Margaret & two days following (July 19-22)
1246	Barton-le-Street N. R.	Richard de Grey	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Wednesday
1249	Settle W. R. (Setel)	Henry de Percy, son of Richard de Percy	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Tuesday
1249	Barnsley W. R. (Bernesleya)	Prior & Convent of Pontefract	Fair on V. F. of St. Michael and two days foll. (Sept. 28-Oct. 1) Market on Wednesday
1251	Aberford W. R.	Richard de Gram- mayr	Fair on V. F. M. of St. Richeriu (April 25-27) Market on Wednesday
1251	Sedbergh W. R.	Alice de Staveley	Fair on V. F. M. of Natlvly V. M. (Set. 7-9) Market on Tuesday
1251	Bedale N. R.	Alan, son of Brian	Fair on V. F. M. of the Ascension Market on Tuesday
1251	Ravenserodd E. R. (Ravenserot)	William de Fortibus, Count of Aumâle	Fair for fifteen days from V. of Nativity V. M. (Sept. 7-22) Market on Thursday
1251	Masham N. R.	John de Wauton	Fair on V. F. M. of the Assump- tion (August 14-16) Market on Friday
1251	Warter E. R.	Prior & Convent of Warter	Fair on V. F. M. of st. James (July 24-26) Market on Wednesday
1252	Heslerton E. R.	Thomas, son of Hugh de Heslerton	Fair on V. F. M. of All Saints (Oct. 31-Nov. 2) Market on Friday
1252	Hovingham N. R.	Roger de Mowbray	Fair on V. F. M. of the Assump- tion (August 14-16) Market on Thursday
1253	Emley, near. Wakefield W. R.	William de Wudchalle	Fair on V. F. of Invention of the Cross and three days foll. (May 2-6) Market on Thursday

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤(続)

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1253	Scampston E. R. (Scameston)	William de Latimer	Fair on V. F. of St. Margaret & two days foll. (July 19-22) Market on Wednesday
1253	Driffield, Little E. R.	Roger de Turkilby	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Wednesday
1253	Ilkley W. R. (Illecley)	Peter de Percy	Fair on V. F. M. of St. Luke & five days foll. (Oct. 17-23) Market on Wednesday
1253	Kildale N. R.	William de Percy	Fair on V. F. M. of St. James (July 24-26) Market on Friday
1253	Great Ayton N. R. (Aton)	Robert de Stuteville	Fair on V. F. M. of St. Andrew (Nov. 29-Dec. 1) Market on Monday
1257	Burton Agnes E. R. (Anneysburton)	Roger de Merlay	Fair on V. F. of St. Martin & six days foll. (Nov. 11-17) Market on Tuesday
1257	Lund on the Wolds E. R. (Lunt)	Marmaduke de Twenge	Fair on V. F. M. of All Saints (Oct. 31-Nov. 1) Market on Thursday
1257	Thwing E. R. (Tuenge)	Marmaduke de Twenge	Fair on V. F. M. of Translation of St. Thomas (July 6-8) Market on Wednesday
1257	Coatham N. R. (Cotum)	Marmaduke de Twenge	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Wednesday
1257	Tanshelf, par. of Pontefract W. R.	Edmund de Lacy	Fair on V. F. M. of Holy Trinity Market on Wednesday
1257	Stonegrave N. R. (Stayngrue)	Simon de Stayngrue	Fair on V. F. M. of Holy Trinity Market on Monday
1257	Kilvington N. R.	Geoffrey de Uppesale	Fair on V. F. M. of St. James (July 24-26) Market on Friday
1258	Wakefield, W. R.	John de Warrenne	Fair on V. F. M. of St. John the Baptist (June 23-25)
1260	Adlingfleet, near Goole W. R.	John de Eyvill	Fair on V. F. of Exaltation of the Cross & six days foll. (Sept. 13-20) Market on Friday

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1260	Gisburn W. R. (Gyseburn)	Abbot and monks of Sallay	Fair on V. F. M. of Nativity V. M. (Sept. 7-9) Market on Monday
1265	Brignall N. R. (Brigenhal)	William Charles	Fair on V. F. M. of Nativity V. M. (Sept. 7-9) Market on Monday
1265	Cliffe, par of Manfield N. R.	William Charles	Fair on V. F. M. of St. Edmun d (Nov. 19-21) Market on Tuesday
1269	Whorlton N. R.	John de Menyll	Fair on V. F. M. of Exaltation of the Cross (Sept. 13-15) Market on Tuesday
1270	Leven E. R.	John de Chishull, Provost of Beverley	Fair on V. F. M. of SS. Simon & Jude (Oct. 27-29) A weekly market
1271	Tadcaster W. R.	Henry de Percy	Fair on V. F. of Assumption & two days foll. (August 15-17) Market on Tuesday
1272	Hedon E. R.	Edmund, Earl of Lancaster (the King's son) and Avelina his wife	Fair on V. F. M. of St. Augustine the Bishop and five days foll
1272	Skipsea E. R.	Edmund, Earl of Lancaster (the king's son) and Avelina his wife	Market on Wednesday
1272	Pocklington (See above 1245)	Edmund, Earl of Lancaster (the King's son) and Avelina his wife	Fair on V. F. M. of All Saints & five days foll. (Oct. 31-Nov. 6)
1279	Richmond N. R.	John of Britanny, Earl of Richmond	Fair on V. F. M. of Exaltation of the Cross & following day (Sept. 13-19)
1279	Kingston-upon-Hull E. R. (Wyk upon le Hull)	Abbot & Convent of Meaux	Fair on V. F. M. of Holy Trinity and twelve days foll. Market on Thursday
1281	Grassington W. R. (Gersington)	Robert de Plumpton	Fair on V. F. M. of St. Michael (Sept. 28-30) Market on Friday

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤(続)



<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1281	Thornton-le-Dale N. R. (Thornton by Pickering)	John de Eston	Fair on V. F. M. of Holy Trinity Fair on V. F. M. of All Saints (Oct. 31-Nov. 2) Market on Tuesday
1282	Newton-Ouse N. R.	Master & Bren of Hospital of St. Leonard, York	Fair on V. F. M. of Nativity of St. John the Baptist (June 23-25) Fair on V. F. M. of All Saints (Oct. 31-Nov. 2) Market on Tuesday
1286	Brandesburton E. R.	Herbret de St. Quentin	Fair on V. F. M. of Invention of the Holy Cross (May 2-4) Market on Thursday
1289	Braithwell, near Rotherham W. R. (Braythwell)	Elias de Hawville	Fair on V. F. of St. Margaret & six days foll (July 19-26) Market on Tuesday
1290	<i>Penisale</i> in Langsett, par. of Penistone W. R. (Peningesale)	Elias de Midehope	Fair on V. F. M. of St. Barnabas (June 10-12) Market on Tuesday
1291	Pickering N. R.	Edmund, Earl of Lancaster (the King's brother)	Fair on V. F. M. of Nativity V. M. (Sept. 7-9) Fair on V. F. M. of Exaltation of the Cross (Sept. 13-15)
1291	Easingwold N. R.	Edmund, Earl of Lancaster (the King's brother)	Fair of V. F. of Nativity V. M. (Sept. 7-9)
1291	Tollerton, Par. of Alne N. R.	Bevis de Clare, Treasurer of St. Peter's, York	Fair on V. F. M. of the Assump- tion (August 14-19) Market on Wednesday
1291	South Cave E. R.	Master & Brethren of the Temple in England	Fair on V. F. of Holy Trinity & two days foll. Market on Monday
1292	Lund-on-the-Wolds E. R. (See above 1257)	Marmaduke de Thwing	Fair on V. F. M. of All Saints (Oct. 31-Nov. 2) Market on Thursday
1292	Thwing E. R.	Marmaduke de Thwing	Fair on V. F. M. of Translation of St. Thomas the Martyr (July 6-9) Market on Wednesday
1292	Coatham N. R. (Cotum) (See above 1257)	Marmaduke de Thwing	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Wednesday

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1294	Pontefract W.R.	Henry de Lacy, Earl of Lincoln	Fair on V.F. of Palm Sunday & three days foll. Market on Wednesday
1294	Campsall W.R. (Camsale)	Henry de Lacy, Earl of Lincoln	Fair on V.F. of St. Mary Magda- len & two days foll. (July 21-24) Market on Thursday
1294	Slaidburn W.R. (Slaghteburne)	Henry de Lacy, Earl of Lincoln	Fair on V.F. of St. Peter ad Vincula & two days following (July 31-Aug. 3)
1294	Almondbury W.R. (Almanbury)	Henry de Lacy, Earl of Lincoln	Fair on V.F.M. of Assumption (August 14-16) Market on Thurseay
1294	Hemingborough E.R.	Prior & Convent of Durham	Fair on V.F. of Assumption & six days foll. (August 14-21) Market on Thursday
1294	Duffield (North) E.R.	*Gerard Salvayn son of Sibyl Salvayn	Fair on V.F.M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Wednesday
1296	Sheffield W.R.	Thomas de Furnivall	Fair on V.F.M. of Holy Trinity Market on Tuesday
1299	Croft N.R.	Henry 1e Scrop	Fair on V.F. of St. Peter ad Vincula (July 31-Aug. 1) Market on Thursday
1299	Kingston-upon-Hull (See above 1279)	Burgesses of the Town	Fair on day of St. Augustine after Easter & 29 days following (Aug. 26-Sept. 24) Markets on Tuesday & Friday
1299	Ravenserodd (See above 1251)	Bugesses of the Town	Fair on V.F. of Nativity V.M. & 28 days foll. (Sept. 7-Oct. 6) Markets on Tuesday & Saturday
1299	Carnaby E.R. (Kernetteby)	Robert de Percy	Fair on V.F. of Nativity of St. John the Baptist & four days following (June 23-28) Fair on V.F. of Decollation of St. John & four days following (Aug. 28-Sept. 2) Market on Thursday
1299	Poklington (See above 1272)	Roger of Pocklington	Fair on V.F. of Annunciation (March 24-25) Market on Wednesday
1300	Leeming, par of Burneston, N.R. (Leaming by Eskelby)	Walter de Langton, Bishop of Coventry & Lichfield (Master of Hospital of St. Leonard, York)	Fair on V.F.M. of Nativity of St. John the Baptist (June 23- 25) Market on Friday

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤(統)

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1300	Thornton by Skipton W.R.	Walter de Muncy	Fair on V.F.M. of Translation of St. Thomas the Martyr & two days following (July 6-9) Market on Thursday
1301	Faxfleet, par. of South Cave E.R.	Abbot & Convent of Thornton-on-Humber	Fair on V.F. of Exaltation of the Cross & two days following (Sept. 13-16) Market on Wednesday
1301	Holme on Spalding Moor E.R.	William le Constable	Fair on V.F.N. of Decollation of St. John the Baptist (August 28-30) Market on Wednesday
1302	Osgodby, par. of Hemingborough E.R.	Robert de Osgodby	Fair on V.F.M. of Nativity V.M. (Sept. 7-9) Market on Wednesday
1303	Pocklington (See above 1299)	Henry de Percy	Fair on V.F. of All Saints (Oct. 31-Nov. 1) Fair on V.F. of St. Margaret (July 19-20) Market on Saturday
1303	Sledmere E.R.	Gerard Salveyn	Fair on V.F. of St. Mary Magdalen (July 21-22) Market on Thursday
1303	Sinnington N.R. (Syvelington)	William le Latimer the younger	Fair on V.F.M. of St. Martin in Winter (Nov. 10-12) Market on Monday
1304	Coxwold N.R. (Cokewald)	Thomas de Coleville	Fair on V.F. of the Assumption (August 14-15) Market on Wednesday
1304	Heslerton (See above 1252)	John de Heselerton	Market on Monday
1304	Lowthorpe E.R. (Louthorpe)	John de Heselerton	Fair on V.F.M. of St. Martin in Winter (Nov. 10-12) Market on Friday
1304	Pannal W.R. (Panhale by Spofford)	Henry de Percy	Fair on V.F. of St. Michael (Sept. 28-29) Market on Tuesday
1304	Wansford, par. of Nafferton E.R. (Wandesford)	Henry de Percy	Fair on V.F. of St. Mary Magdalen (July 21-22) Market on Thursday

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1305	Carperby N. R. (Kerperby)	Gilbert de Wauton	Fair on V. F. M. of St. James (July 24-26) Fair on V. F. M. of St. Andrew (Nov. 29-Dec. 1) A weekly market
1305	Emsbay W. R.	Prior and Canons of Bolton	Fair for three days before & on F. M. of St. Cuthbert in Autumn (Sept. 1-5)
1305	Swinefleet, par. of Whitgift W. R.	Henry de Lacy, Earl of Lincoln	Fair on M. of Exaltation of the Holy Cross & three days foll. (Sept. 15-18) Market on Thursday
1305	Keighley W. R. (Kyghelay)	Henry de Kyghelay	Fair on V. F. M. of SS. Simon & Jude (Oct. 27-29) Market on Wednesday
1307	*Burton-in-Lonsdale W. R.	John de Moubray	Fair on Whitsunday & two days following Fair on V. F. M. of St. James Apostle (July 24-26) Market on Monday
1307	Kirkby Malzeard W. R. (Kyrkeby Malasart)	John de Moubray	Fair on V. F. M. of Nativity V. M. (Sept. 7-9) Fair on V. F. M. of St. Michael (Sept. 28-30) Market on Monday
1307	Wensley N. R. (Wandsley)	James de Wandesleye	Fair on V. F. M. of Holy Trinity Market on Wednesday
1307	East Witton N. R.	Abbot & Convent of Jervaulx	Fair on V. F. of the Assumption & six days foll. (August 14-21) Fair on V. F. of St. Martin in Winter (Nov. 10-11) Market on Monday
1307	Aberford (See above 1251)	Hugh 1c Despenser	Fair on V. F. M. of. Denis (Oct. 8-10) Market on Wednesday
1307	Rotherham W. R. (Roderham)	Robert de Waddesleye	Fair on V. F. M. of St. Nativity of St. John the Baptist (June 23-25) Market on Friday
1307	Worley, par. of Tankersley W. R.	Nicholas de Wortley	Fair on V. F. M. of Whitsunday Market on Thursday
1307	Pickill N. R. (Pikehale)	Jolland de Nevill	Fair on V. F. of Nativity V. M. & eight days foll. (Sept. 7-16) Market on Saturday

十三世紀イギリスにおける羊毛輸出貿易とその基盤(続)

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
十三世紀 イングランド における羊毛 輸出貿易と その基盤 (続)	1307 <i>Penisale</i> in Langsett, par. of Penistone (See above 1290)	William de Sheffield	Fair on V. F. M. of St. Barnaba <sup>s</sup> (June 10-12) Market on Tuesday
	1309 Rotherham (See above 1307)	Edmund de Dacre	Fair on V. F. M. of St. Edmund the Archbishop & five days foll (Nov. 15-22) Market on Friday
	1310 Bowes (See above 1245)	John of Brittany, Earl of Richmond	Fair on V. F. of Translation St. Swithin & two days following (July 14-17) Market on Friday
	1310 Patrington-in- Holderness E. R.	William, Archbishop of York	Fair on V. F. of Translation St. Thomas the Martyr (July 6-7) Market on Monday
	1310 Knaresborough W. R.	Peter de Gaveston, Earl of Cornwall, & Margaret his wife	Fair on two days before & on F. of St. Margaret (July 18-20) Market on Wednesday
	1310 Boroughbridge W. R.	Peter de Gaveston, Earl of Cornwall, & Margaret his Wife	Fair on two days before & on F. of St. James (July 23-25) Fair on two days before & on F. of Nativity V. M. Fair on two days before & on F. of All Saints (Oct. 30-Nov. 1) Market on Saturday
	1310 Hutton Cranswick E. R. (Crauncewyk)	Geoffrey de Hothum	Fair on V. F. M. of St. Bartholo- mew (Aug. 23-25) Market on Tuesday
	1310 Appletreewick W. R.	Prior & Convont of Bolton-in-Craven	Fair on two days before & on F. M. of St. Luke (Oct. 16-19)
	1311 Thorner W. R.	Simon de La Roche	Fair on F. of Translation of St. Thomas the Martyr (July 7) Market on Wednesday
	1311 Market Weighton E. R. (Wtghton)	Payn Tybotot & Agnes his Wife	Fair on V. F. M. of St. Mary Magdalen (July 21-23) Market on Tuesday
	1312 Wath-upon-Dearne W. R. (Wath)	Reyner le Fleming	Fair on V. F. of St. Matthew (Sept. 20-21) Market on Tuesday
	1313 Warter (See above 1251)	Prior & Convent of Wartep	Market on Wednesday

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1313	Duffield (North) (See above 1294)	Gerard Salveyn	Fair on V. F. M. of. St. James (July 24-26) Market on Wednesday
1314	South Cave (See above 1291)	Peter Dayvill	Fair on V. F. M. of Holy Trinity Market on Monday
1316	Rotherham (See above 1309)	Abbot & Convent of Rufford	Fair on day before V., the V. F. of St. Edmund & five days foll (Nov. 18-25) Marker on Monday
1317	Thonhill W. R.	John de Thornhill	Fair on day before V., the V. F. of St. Mary Magdalen (July 20-22) Market on Thursday
1317	Elland W. R. (Eland)	John de Eland	Fair on day before V., the V. F. of St. Barnabas (July 9-11) Fair on bay before v., the V. F. of St. Peter ad Vincula (July 3 0-August 1) Market on Tuesday
1318	Wensley (See above 1307)	Henry le Scrop	Fair on V. F. of Holy Trinity Market on Wednesday
1318	Cottingham E. R.	Thomas Wake	Fair on V. F. M. of Translation of St. James (July 24-26) Fair on V. F. M. of Martinmas (Nov. 10-12) Market on Tuesday
1318	Driffield, Little (See above 1253)	John de Brittany, Earl of Richmond	Fair on Monday after octave of Easter & three days following Market on Friday
1318	Bootham, York	Abbot & Convent of St. Marl, York	Fair on V. F. M. of Nativity V. M. (Sept. 7-9) Market on Wednesday
1319	Skelton-in- Cleveland N. R.	John de Fauconberg	Fair on Monday in Whitsun week & two days following Market on Saturday
1320	Pateley Bridge W. R. (Patheleybrigge in Neddredale)	Williem de Melton, Archbishop of York	Fair on three days before, and F. M. of Nativity V. M. (Sept. 5-9) Market on Tuesday
1320	Otley (See above 1239)	William de Melton, Archbishop of York	Fair on four days before, and F. M. of St. Mary Magdalen (July 18-23)
1321	Burton Constable, par. of Fingall N. R.	Geoffrey le Scrop	Fair on V. F. of St. Mary Mag- dalen (July 21-22) Market on Friday

十三世紀イングランドにおける羊毛輸出貿易とその基盤 (続)

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1327	Topcliffe N.R.	Henry de Percy	Fair on V.F.M. of Translation of St. Thomas the Martyr (July 6-8) Market on Wednesday
1328	Bedale (See above 1251)	Thomas de Sheffield	Fair on V.F.M. of St. Michael (Sept. 28-30) Fair on V.F.M. of St. John the Baptist (June 23-25)
1328	Masham (See above 1251)	Geoffrey le Scrop	Fair on V.F. of St. Barnabas (June 10-11) Fair on V.F. of the Assumption (August 14-15) Market on Wednesday
1331	Wakefield (See above 1258)	John de Warenne, Earl of Surrey	Fair on V.F.M. of St. Oswald (August 4-6)
1334	Kilham (See above 1227)	William de Melton, Archbishop of York	Fair on V.F.M. of St. Laurence (August 9-11) Fair on three days before, on F. All Saints & two days following (Oct. 29 -Nov. 3) Market on Saturday
1335	Aberford (See above 1251)	William de Gramary	Fair on V.F.M. of St. Richard in Winter (April 2-4) Market on Wednesday
1337	Whorlton (See above 1269)	Nicholas de Menyll	Fair on V.F.M. of Exaltation of the Cross (Sept. 13-15) Market on Tuesday
1338	Skipsea-in- Holderness (See above 1272)	Men of the Town	Fair on F. All Saints & three days following (Nov. 1-4) Fair on F. St. Thomas the Martyr & three days following (Dec. 29-Jan. 1) Market on Thursday
1338	Withernsea E.R.	Men of the Town	Fair on F. of the Assumption & three days foll. (August 15-18) Fair on F. of Nativity of V.M. & three days foll. (Sept. 8-11) Market on Wednesday
1343	Buttercrambe, par. of Bossall N.R.	Thomas Wake of Lydell	Fair on St. Botolph's Day (June 17) Fair on St. Leonard's Day (Nov. 6) Market on Monday

<i>Year</i>	<i>Place</i>	<i>Grantee</i>	<i>Appointed Days</i>
1344	Studley, near Ripon W. R.	Thomas de Bourn	Fair on F. of Nativity V. M. & eight days foll. (Sept. 8-16) Market on Wednesday
1346	Womersley W. R.	Roger of New market	Fair on V. F. St. Martin in Winter (Nov. 10-11) Market on Thursday
1348	Stainforth-in- Hatfield W. R.	Edmund de Langley, the king's son	Fair on V. F. of Nativity V. M. & eight days foll. (Sept. 7-16) Market on Friday
1348	North Newbald E. R.	John de Wynwyk, Prebendary of N. Newbald prebend in York Minster	Fair on V. F. M. of St. Laurence (August 9-11) Market on Thursday
1350	Riccall E. R.	William de Excestre, King's clerk, Pre- bendary of Riccall prebend in York Minster	Fair on V. F. M. of St. Margaret (July 19-21) Market on Wednesday

(McCutcheon, op. cit., pp. 161-169)

十三世紀  
イ  
ン  
グ  
ラ  
ン  
ド  
に  
お  
け  
る  
羊  
毛  
輸  
出  
貿  
易  
と  
そ  
の  
基  
盤  
(  
続  
)